

卒業論文 2003年12月19日提出

『スペクトル楽派の音楽 トリスタン・ミュライユの《デザンテグラシオン》をめぐって』  
Music of the spectral school : round about the work of Tristan Murail “Désantegration”  
(1982-3)

《デザンテグラシオン》はマダム・ダヴィドのイルカムへの依頼で、音楽アシスタントのアンドリュウ・ジェルゾと共にイルカム内のスタジオで制作され、出版された。1983年2月15日、ペーテル・エトヴェシュ指揮、アンサンブル・アンテルコンテンポランによってイルカム構内のスペースにおいて初演された。

《デザンテグラシオン》という題名は用いた技術の過程について述べている。音色を個別の構成要素へと分解(デザンテグラテ)し、我々の耳に音の内部構造を解き明かしつつ、我々の目前で音は解け合う。しかし、音楽の絶え間ない流れが、秩序の瞬間と無秩序、ノイズの間で、不規則な非倍音へと分解、変質していくこともまた同様に、おそらく無意識的にほのめかされている。

テープと13楽器のための《デザンテグラシオン》は、作曲者による長年の音響スペクトルの研究の成果として創作された。本作品において用いられる素材は整数倍音と非整数倍音のスペクトル解析によって行われる音の解体とその再構築によって得られており、最も微細な技法から構造における展開方法までこの素材から導き出された技法で構築されている。

作品で用いられるスペクトルは皆、楽器音に含まれる倍音列の分析から抽出されたものであり、セクションごとに、ピアノ、クラリネット、オーボエ、フルート、コントラバス等、様々な楽器が元となっている。本作品で、ミュライユは Harmony と Timbre という二つの響きの概念について、楽譜の注において区別を言明している。この差異とは何か。これを確かめるべく、曲中で用いられる音響の理論的枠組みとその使用方法を確認し、考察を行った。

ミュライユは音響を単なる響きの枠組みを超え、音楽の形式を構成する上での手段として用いるに至った。このような音色の取り扱いこそが、スペクトル楽派全体の特徴である。ミュライユは、以下に述べるような作曲法への展開を行っている。《デザンテグラシオン》において、ミュライユは曲を構成する手段として、音響合成を4種類の方法に分けている。スペクトル領域の断片化、フィルターによってスペクトル領域に制限をかける方法、音色の旋律化、そして非倍音スペクトルの構築である。二つの音声信号を掛合わせる FM 合成、RM 合成、加算合成などをを用いて楽器の倍音列をスペクトル解析し、オーケストラとテープによって模倣することによって、再構築した。

過去の全面的セリー主義は、音色に内在する科学のレベルで音の構造を規定する段階へと移行した。スペクトル楽派の音楽は、音響的マクロ構造と音響的ミクロ構造の中に、音響学の発展とテクノロジーによって可能となった様々な手法によって作曲技法を創造した。音楽作品として実現させた彼等の音楽美学は、60年代の前衛音楽とは立場を分かちつつ、彼等は音楽史

の一旦を担うにふさわしい功績を残すに至った。スペクトル楽派の作曲家達は、音とは特定の楽譜音楽における音符のことを指したわけではなく、また複数の調性の対比を表現するという習慣的作曲のためのものでもなかった。スペクトル楽派は、セリー主義の批判的継承として音楽と音響学のせめぎ合いを背負いつつ表現を模索していた。

音楽技法としてのスペクトルの使用はシュトックハウゼンによってこの時提起されていたが、これは 1966 年のダルムシュタット国際音楽祭にてアドルノとリゲティの議論の的にもなった Sonority と Tonality の区別に関する議論に発展し、スペクトル楽派にとっては Timbre と Harmony の問題として受け継がれた。音響学と聴覚認知科学が発展した 20 世紀後半において、音の本質をどう捕えるかという問題は、シュトックハウゼンが Sonority と Tonality を区別すべきか否か悩んでいた状況よりも遥かに複雑で難解な問題になっているように見受けられる。ミュライユはこれまで確認して来たように、音響的知見をそのまま用いるのではなく、新たな作曲文法的手段として展開している。Timbre によってミュライユの音響学的知見から見た音の現象を捉え、その一方で Harmony によって、彼が様々な先人たちから影響を受け、培って来た音楽観の延長としての音楽を表現した。ミュライユはデザンテグラシオンの作曲にあたって、このせめぎ合いを描いていると述べている。しかしまた彼は同時に最終的に自分が表現したいのは Harmony であると言っている。これは、スペクトル楽派が決して音響学の実験結果のように作品を扱ってはいないことを指し示している。彼が《デザンテグラシオン》で行ったのは、音の内部にある関係性を断片化することによって新たな響きを構築することであり、音の物理的現象と作曲家としてのせめぎ合いの中で、ミュライユは音響的知見の研究に真摯に取り組み、かつ新たな作曲文法的手段として展開した。つまり、ミュライユは Timbre(音色)が Harmony(倍音)の集合体であるという安易な理解ではなく、それをも含む、響き全体の構築との間にあるせめぎ合いに挑んでいるのである。《デザンテグラシオン》は音の物理的現象に対し、様々な形でもって分解、解体を行うことを通じ、再び音を構築し、新たな響きを作り出した。これは 20 世紀音楽史におけるテクノロジーと作曲の関わり方としての一つの回答であり、知識と経験、計算されうる要素と計測不可能な要素の間の 1980 年代初頭におけるひとつの回答であった。